

那古観音祭



令和八年 年番 寺赤組

補陀洛は
那古の寺

岸のつぼさを
てら赤



第六番
芝崎組

第五番
東藤組

第四番
宿組

第三番
大芝組

第二番
濱組

年番
寺赤組



令和八年 那古観音祭 5月23日(土) よいまち / 5月24日(日) ほんまち ※日程は予定



寺赤組 第九十六代後醍醐天皇山車



特 徴：館山市有形民族文化財指定

初代 後藤利兵衛橋義光の遺作と言われている

「太平記」の軍記物を主題とした意匠

二代目・初代は「にわか」と呼ばれる簡素な花車

彫刻師：初代 後藤利兵衛橋義光

最晩年85歳～88歳作 刻銘

製作年：明治三十二年(1899年)

大 幕：如意輪寺の楠木正行・正時、和田行忠・源秀兄弟

扁 額：建武中興

提 灯：吉野の桜 ※大覚寺統の朝廷に因む桜模様

梶 棒：可動旋回式梶棒

車 輪：木製鉄枠2列構造



「那古観音祭礼」は、明治三十年に東藤、大芝、芝崎、濱の4地区により年番が定められ、同4地区の協議会にて例祭日を「千手千眼観自在菩薩」の縁日である旧暦十八日と定められた。

寺赤地区は、明治三十年からの「那古観音祭礼」には参加せず単独で引き廻しを行っていたが、明治四十三年に「那古観音祭礼」合同曳き廻しに加盟した。この時点では、「宿組」を除く5地区で曳き廻されており、「宿組」の加盟により現在の6地区による「那古観音祭礼」となったのは、大正十二年である。

この那古地区における寺赤組の山車は、三層構造の後期江戸型山車であるが、一般的なそれらと異なり独特の意匠を有している。御雛子臺上部三段彫刻、擬宝珠を用いない中高欄の彫刻、十二体の金剛力士（力神）など、初代 後藤利兵衛橋義光の「太平記」の世界を表現した傑作とされ、あらゆる面で技巧的に秀でている。

令和8年 年番記念企画

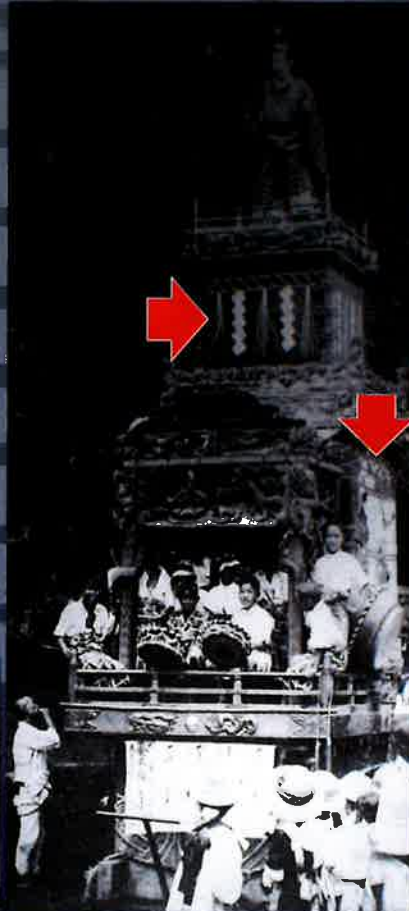
令和8年 年番記念企画として、祭礼に参加される方々への記念品として、明治から使用してきた山車幕素地と、昭和から使用してきた泥幕を用いた“記念サコッシュ”を限定配布します。一つ一つ手作りで、どれ一つ同じデザインがない唯一無二の記念品です。

また、明治30年以前から「にわか」と称する花車で使用していた扁額が、山車小屋に保管されていました。年番札と合わせて、年番引き廻し時にお披露目します。どちらも歴史的価値が高い企画となります。

是非とも、ご期待ください。



明治30年以前の扁額
「建武中興」



明治～昭和使用
山車幕素地



昭和～令和使用
泥幕